

エホバはわたしの牧者。

わたしは何にも不足しません。

神は草の多い牧場にわたしを横たわらせ、

水の十分にある休み場にわたしを導いてくださいます。

神はわたしの魂をさわやかにしてくださいます。

そのみ名のために義の進路にわたしを導いてくださいます。

たとえ深い陰の谷を歩もうとも、

わたしは何も悪いものを恐れません。

あなたがわたしと共にいてくださるからです。

あなたのむち棒と杖は、わたしを慰めてくれるものなので
す。

あなたは、わたしに敵意を示す者たちの前で、わたしの前に
食卓を整えてくださいます。

あなたはわたしの頭に油を塗ってくださいました。

わたしの杯はあふれんばかりです。

確かに、善良と愛ある親切が、わたしの命の日の限り
わたしを追うことでしょう。

わたしは長い日々にわたって、エホバの家に住むので
す。

知恵を見いだした人、識別力を得る人は幸いだ。
それを利得として得ることは銀を利得として得ることに勝り、
それを産物として得ることは金そのものにも勝るからである。
それはさんごよりも貴重であり、
あなたの他のすべての喜びもこれに及ばない。
長い日々がその右の手にあり、その左の手には富と栄光がある。
その道は快い道、その通り道はみな平安である。
それはこれをとらえる者たちには命の木であり、
これをしっかりととらえている者たちは幸いな者と呼ばれる。
エホバは知恵をもって自ら地の基を据えられた。
識別力ををもって天を固く定められた。
その知識によって水の深みは分かたれ、
雲のかかった空は常に小雨を滴らせる。
我が子よ、それらがあなたの目から離れて行くことのないように。
実際的な知恵と思考力を守れ。
そうすれば、それはあなたの魂にとっての命となり、
あなたののどにとっての麗しさとなるであろう。
そのとき、あなたは自分の道を安らかに歩み、
あなたの足は何物にもぶつからないであろう。
あなたはいつ横たわろうとも、少しも怖れを感じない。
あなたは確かに横たわり、あなたの眠りは必ず快いものとなる。
突然の怖ろしいことも、邪悪な者たちを襲うあらしも、
それが到来しようとしているからといって、
あなたは恐れる必要はない。
エホバご自身が実際にあなたの確信となってくださり、
あなたの足を必ず捕らわれから守ってくださるからである。

わたしは神が人間の子らに携わらせようとしてお与えになった営みを見た。神はすべてのものをその時にかなって美しく造られた。

定めのない時をさえ彼らの心に置き、まことの神の行なわれた業を、人間が始めから終わりまで決して見いだすことができないようにされた。

わたしは、人の生きている間に歓び、良いことをする以上に彼らにとって良いものは何もないことを、また、人はみな、食べ、まさしく飲み、そのすべての骨折りによって良いことを見るべきであるのを知るようになった。それは神の賜物なのである。

わたしは、まことの神が造られるすべてのもの、それは定めのない時に至るまで存続することを知るようになった。

それに加えるべきものは何もない。

それから取り去るべきものも何もない。

まことの神がそれを造られたのである。

それは、人々が神のゆえに恐れるためである。

あったもの、それは前から既にあったのである。

あるようになるものは既にあったのである。

まことの神ご自身が、追われるものを自ら求めつづける。

そして、わたしはさらに日の下で、公正の場に邪悪があり、義の場に邪悪があるのを見た。

わたしは心の中で自ら言った、「まことの神は義なる者をも邪悪な者をも共に裁かれる。そこにはすべての事に、またすべての業に関して時があるからである」と。

ただ銀を愛する者は銀に満ち足りることなく、富を愛する者は収入に満ち足りることがない。これもまたむなしい。

良い物が多くなると、これを食べる者も必ず多くなる。そして、これを所有する大いなる者には、自分の目でそれを見ること以外に何の益があろう。

仕える者の眠りは、自分の食べる分が少ないか多いかにかかわりなく甘い。しかし、富んだ者の豊富さはこれに眠りを許さない。

わたしが日の下で見た厳しい災いがある。富はそれを所有する大いなる者にとって、その人自身の災いのために保たれているのである。そして、その富は災いの多い営みのために滅びうせ、その人は自分の手に全く何も無いときに子の父となった。人は母の腹から出たときと同じように、また裸で去って行く。来たときと同じである。その骨折りに対して、自分の手に携えてゆけるものを何一つ運び去ることはできない。

そして、これもまた厳しい災いである。人はその来た通りに去って行く。それで、風のために骨折って働きつづける者にどんな益があろう。また、その者は毎日まさしく闇の中で食べ、多くのいら立ち、身の病気、さらに、憤りを感じる理由がそれに伴う。

見よ、わたしが自ら見た最善のこと、すなわち美しいことは、まことの神が人にお与えになった命の日数の間、人が食べ、飲み、

日の下で骨折って働くそのすべての骨折りによって良いことを見ることである。それがその人の分だからである。

また、まことの神は富と物質の所有物とを与えたすべての人に、それから食べ、自分の分を持ち去り、自分の骨折りを歡ぶことをも可能にされた。これが神の賜物なのである。その人が自分の命の日を覚えることは度々あることではないからである。なぜなら、まことの神はその人をその心の歡びに専念させておられるからである。

霊をとどめる力を霊に対して持っている人はだれもない。
また、死の日には何の支配の力もありえない。
また、その戦いには放免もない。
そして、邪悪さもこれにふける者たちを逃れさせはしない。

わたしはこのすべてを見た。そして、人が人を支配してこれに害を
及ぼした時の間に、日の下で行なわれたすべての業に
心を用いるのであった。
しかし、そうではあっても、わたしは邪悪な者たちが葬られるのを、
彼らが入って来ては聖なる場所から去って行き、彼らがその
ように行動した都市で忘れ去られるのを見た。
これもまたむなしいことである。

悪い業に対する刑の宣告が速やかに執行されなかったため、そ
れゆえに人の子らの心はその中で悪を行なうよう凝り固まっ
てしまった。
罪人が百回悪を行ない、その思いのままに長らえようとも、わたし
はまことの神を恐れる者たちが神を恐れていたために良い結
果になることに気づいてもいる。
しかし、邪悪な者は決して良い結果を見ることなく、影のようなそ
の日々を長くすることもない。
彼は神を恐れていないからである。

地上で行なわれているむなしいことがある。邪悪な者たちの業に
生じるかのような事態が自分の身に生じている義なる者たち
がいる。義なる者たちの業に生じるかのような事態が自分の
身に生じている邪悪な者たちがいる。
わたしはこれもまたむなしいと言った。

彼はさげすまれ、人々に避けられ、
痛みと病を親しく知ることとに定められた人であった。
そして、わたしたちから顔を覆い隠すことが
なされているかのようにであった。
彼はさげすまれ、わたしたちは彼を取るに足りない者とみなした。

まことに、わたしたちの病は彼が担い、
わたしたちの痛みは彼が負ったのである。
しかし、わたしたちは彼を災厄に遭い、神に撃たれ、
苦しみを受けた者とみなした。

しかし、彼はわたしたちの違犯のために刺し通され、
わたしたちのとがのために打ち碎かれるのであった。
わたしたちの平安のための懲罰が彼に臨み、
彼の傷ゆえにわたしたちのためのいやしがあった。

わたしたちは羊のように皆さまよい、それぞれ自分の道に向かった。
エホバは、わたしたちすべての者のとがが
その者に出会うようにされた。

彼は激しい圧迫を受け、苦しめられるままに任せていた。
彼はそれでも口を開こうとはしなかった。
彼はほふり場に向かう羊のように連れて行かれ、
毛を刈る者たちの前で黙っている雌羊のように、
自分も口を開こうとはしなかった。

いまわたしは新しい天と新しい地を創造しているからである。
以前のことは思い出されることも、心の中に上ることもない。
しかし、あなた方はわたしが創造しているものに永久に歓喜し、
それを喜べ。

いまわたしは、エルサレムを喜びのいわれ、
その民を歓喜のいわれとして創造しているからである。
そして、わたしはエルサレムを喜び、わたしの民に歓喜する。
その中で泣き声や、悲しげな叫び声が聞かれることはもはやない。

数日しか生きない乳飲み子も、自分の日を全うしない老人も、
その場所からはもはや出ない。

人は百歳であっても、ほんの少年として死ぬからである。

罪人については、その者が百歳であっても、

その身の上に災いを呼び求められるであろう。

そして、彼らは必ず家を建てて住み、必ずぶどう園を設けて
その実を食べる。

彼らが建てて、だれかほかの者が住むことはない。

彼らが植えて、だれかほかの者が食べることはない。

わたしの民の日数は木の日数のようになり、わたしの
選ぶ者たちは自分の手の業を存分に用いるからである。

彼らはいたずらに労することなく、騒乱のために産み出すこともない。

彼らはエホバの祝福された者たちからなる子孫であり、

彼らと共にいるその末孫もそうだからである。

そして、彼らが呼ばれる前に、わたし自身が答え、

彼らがまだ話しているうちに、わたし自身が聞くことになる。

「おおかみと子羊が一つになって食べ、ライオンは雄牛のようにわ
らを食べる。蛇に関しては、その食物は塵となる。これらはわ
たしの聖なる山のどこにおいても、害することも損なうこともし
ない」と、エホバは言われた。

しかしその人は、自分が義にかなっていることを示そうとしてイエスに言った、「わたしの隣人とはいったいどれでしょうか」。

イエスは答えて言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中で、強盗たちに襲われました。彼らはその衣をはいだうえに殴打を加え、その人を半殺しにして去って行きました。

さて、たまたま、ある祭司がその道路を下って行くところでしたが、その人を見ると、反対側を通って行ってしまいました。同じように、ひとりのレビ人もまた、そこまで来て彼を見ると、反対側を通って行ってしまいました。

ところが、その道路を旅行していたあるサマリア人がやって来ましたが、彼を見て哀れに思いました。

それで、その人に近づき、その傷に油とぶどう酒を注いで包帯をしてやりました。それから彼を自分の畜獣に乗せ、宿屋に連れて行って世話をしたのです。

そして次の日、デナリ二つを取り出し、それを宿屋の主人に渡して、こう言いました。『この人の世話をしてください。そして、何でもこれ以外にかかるものがあれば、わたしがここに返って来たときに返しますから』。

これら三人のうちだれが、強盗に襲われた人に対して隣人になったと思いますか」。

彼は言った、「その人に対して憐れみ深く行動した者です」。

するとイエスは言われた、
「行って、あなたも同じようにしてゆきなさい」。

どんな人にも光を与える真の光が世に入ろうとしていた。

彼は世にいたのであり、世は彼を通して存在するようになったのに、世は彼を知らなかった。

彼は自分のところに來たのに、その民は彼を迎え入れなかった。

しかし、彼を迎えた者、そうした者たちすべてに対しては、神の子供となる権限を与えたのである。

その者たちが、彼の名に信仰を働かせていたからである。

彼らは、血から、肉的な意志から、また人の意志から生まれたのではなく、神から生まれたのである。

こうして、言葉は肉体となってわたしたちの間に宿り、わたしたちはその栄光、父の独り子が持つような栄光を目にしたのである。

彼は過分の親切と真理とに満ちていた。

(ヨハネは彼について証しをし、実に—この人こそそれを言った人であった—こう叫んだのである。「わたしの後に来る方は、わたしの前を進まれた。わたしより先に存在されたからである」。)

というのは、わたしたちはみな彼に満ち満ちたものの中から、しかも過分の親切の上にさらに過分の親切を受けたからである。

なぜなら、律法はモーセを通して与えられ、過分の親切と真理とはイエス・キリストを通して存するようになったからである。

いまだ神を見た人はいない。

父に対してその懐の位置にいる独り子の神こそ、彼について説明したのである。

あなた方の愛を偽善のないものにしなさい。
邪悪なことは憎悪し、善良なことにはしっかりと付きなさい。
兄弟愛のうちに互いに対する優しい愛情を抱きなさい。
互いを敬う点で率先しなさい。
自分の務めを怠ってはなりません。霊に燃えなさい。
エホバに奴隷として仕えなさい。希望によって喜びなさい。
患難のもとで耐え忍びなさい。たゆまず祈りなさい。

聖なる者たちと、その必要に応じて分け合いなさい。
人をもてなすことに努めなさい。迫害する人を祝福しつつけなさい。

祝福するのであって、のろってはなりません。
歓ぶ人たちと共に喜び、泣く人たちと共に泣きなさい。
他の人たちのことを、自分自身に対すると同じような気持ちで
考えなさい。

高ぶった事柄を思わず、むしろ、へりくだった事柄を求めなさい。
ただ自分の目から見て思慮深い者となってはなりません。

だれに対しても、悪に悪を返してはなりません。
すべての人の前に良いものを備えなさい。
できるなら、あなた方に関するかぎり、すべての人に対して
平和を求めなさい。
わたしの愛する者たち、自分で復しゅうをしてはなりません。
むしろ神の憤りに道を譲りなさい。こう書いてあるからです。
「復しゅうはわたしのもの、わたしが返報する、とエホバは言われ
る」。

そしてこうあるのです。「あなたの敵が飢えているなら、
食べさせなさい。渴いているなら、飲む物を与えなさい。
そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになるのであ
る」。

悪に征服されてはなりません。
むしろ、善をもって悪を征服してゆきなさい。

それでも、より大きな賜物を熱心に求めてゆきなさい。ですが、わたしはさらに勝った道をあなた方に示します。

たとえわたしが人間やみ使いのいろいろなことばを話しても、
愛がなければ、音を立てる一片のしんちゅうか、ただ鳴り響くシンバルとなっています。

そして、たとえ預言の賜物を持ち、すべての神聖な奥義とすべての知識に通じていても、

また、たとえ山を移すほどの全き信仰を持っていたても、
愛がなければ、何の価値也没有せん。

そして、ほかの人たちに食物を与えるために自分のすべての持ち物を施しても、また、
自分の体を渡して自分を誇れるようにしたとしても、
愛がなければ、わたしには何の益にもありません。

愛は辛抱強く、また親切です。

愛はねたまず、自慢せず、思い上がらず、みだりな振る舞いをせず、
自分の利を求めず、刺激されてもいら立ちません。

傷つけられてもそれを根に持たず、不義を歡ばないで、
真実なことと共に歡びます。

すべての事に耐え、すべての事を信じ、すべての事を希望し、
すべての事を忍耐します。

愛は決して絶えません。

また彼は、水晶のように澄みきった、命の水の川をわたしに見せてくれた。

それは神と子羊とのみ座から出て、その大通りの中央を流れていた。

そして、川のこちら側と向こう側には、月ごとに実を生じ、
実を十二回生み出す、命の木があった。
そして、その木の葉は諸国民をいやすためのものであった。

そして、もはや何ののろいもない。
神と子羊とのみ座がその都市の中にあり、
その奴隷たちは神に神聖な奉仕をささげるのである。

彼らは神の顔を見、そのみ名が彼らの額にあるであろう。

また、夜はもうない。それで彼らはともしびの光を必要とせず、
太陽の光も持たない。
エホバ神が彼らに光を与えるからである。

そして彼らは限りなく永久に王として支配するであろう。

また彼はわたしに言った、
「これらの言葉は信頼できる真実なものである。
すなわち、預言者たちの靈感の表現の神であるエホバが、
ほどなくして必ず起きる事柄をご自分の奴隷たちに示すため、
そのみ使いを遣わされたのである。
そして、見よ、わたしは速やかに来る。
この巻き物の預言の言葉を守り行なう者は幸いである」。